旧約聖書の中の祈り

□「祈り」に関する学び全体のテーマ

1. 祈りの原則
2. 祈りの３つのタイプ
3. 旧約聖書の中の祈り
4. 新約聖書の中の祈り
5. 祈りの条件
6. 祈りの構成と内容
7. 祈りのルール
8. 祈りの諸問題

□「旧約聖書の中の祈り」の学びの進め方とその目的

旧約聖書の中には、全部で48の祈りがあります。これらの祈りをひとつひとつ学んでいって、祈りについてのいくつかの結論を導きたいと思います。その結論を先に言うと、次のとおりです。

1. 旧約聖書の中の祈りの大半は、とりなしの祈りである
2. 祈りは、しばしば、嘆願である
   神に何かを求める。たとえば、エリシャは、自分のしもべに天使たちの軍勢を見させてほしい、と神に願った。ヨナは、いったんは拒んで逃げてしまった使命を再び帯びて遣わされるようにと祈った。ヒゼキヤは重病の中で自分の命が助かるように祈った。ネヘミヤは周辺からの激しい脅しから守られるように祈った。
3. いくつかの祈りは、神に感謝をささげる、あるいは神をほめたたえる歌である
   そのような祈りをしたのは、たとえば、ハンナ、ダビデ、そしてハバクク
4. いくつかの祈りは、特別な状況の中で神のみこころを尋ねる祈りである
5. 祈りは、時として、神の約束に基づいてなされる
   モーセ、ソロモン、そしてダニエルは、それぞれ、それまでに神から与えられていた約束に基づいて祈った。彼らは、神が約束を守るお方であることを知っていたからこそ、その約束を握って祈ったのである。
6. 祈りは、時として、罪の告白を伴う（ダニエル9章）
7. 祈りは、時として、祝福の祈りである
   レビ族の祭司がイスラエル民族全体のために祝福の祈りをする（Ⅱ歴代30：23～27）
8. イスラエル民族の中で責任ある地位につく指導者は、民族全体のために祈る責務を負う
   そのような例は、サムエル、ソロモン、そしてエズラ

9. 祈りには、時折、付随した行動が伴う。泣く、断食する、荒布を着る、灰をかぶる
10. 祈る時、人々は様々な姿勢をとっている。立つ、跪く（ひざまずく）、両手を上に伸ばす、エルサレムとその中にある神殿の方を向く、犠牲の動物を前にして祈る、寝室で壁の方を向く、など
11. ダニエルは1日のうちに3度、時間を決めて祈っていた
特定の時刻を祈りの時間とするような定めは、ない。しかし、一日の中で、自分で時間を決めて祈る習慣をつけることは、神との交わりを通して祝福を受けるために必要
12. 祈りは、モーセの律法の中で義務付けられていない。また、あらかじめ書かれた式文のような祈りは、旧約聖書の中にひとつもない。祈りとは、自分が必要を覚え、その必要に応じる力を神が持っていると意識している人から、自然と沸き起こってくるものである。
13. 祈りは、時折、犠牲をささげながら祈られる。犠牲をささげないとしても、犠牲をささげる場所や時間と関連付けて祈ることもあった
14. 旧約聖書の中に記録された祈りには、大きくは5つの要素がある
    (1) 神による導き
    (2) 神による癒し
    (3) 神のさばきを免れる、あるいは止める
    (4) 神に自分の個人的な望みや必要を求める
    (5) 神に特別な状況のもとで守りを求める

前回までに48の祈りのうち、30の祈りを学びました。本日は、31～42の祈りです。

□本日のアウトライン

31. イスラエル民族の罪を告白するエズラの祈りに関して
32. エルサレムの城壁再建に関して
33. 城壁再建についてペルシヤ王に許可を求めたときの祈りに関して
34. 城壁再建を巡り反対者による攻撃から守られることに関して
35. 祈りは感謝の歌で始まることに関して
36. ヨブによる友人たちのための祈りに関して
37. アッシリヤから守られるようにとのイザヤの祈りに関して
38. アッシリヤから守られるようにとのヒゼキヤの祈りに関して
39. 病気から癒されるようにとのヒゼキヤの祈りに関して
40. エレミヤの象徴的行為に関して
41. 王ゼデキヤがバビロニヤに反逆しようとしたときの、エレミヤの祈り
42. 残留の民たちに関するエレミヤの祈り

旧約聖書の中の祈り【48の祈り】　④

参考：本日の12件の祈り（上の行から下の行へ時系列で）

番号	時期	祈った人	時代背景など
36	前2000頃	ヨブ	創世記のアブラハムと同時代
37	前701	預言者イザヤ	南王国　アッシリヤの脅威に直面した
38～39		王ヒゼキヤ	アッシリヤを退けた後、王は病気に
	前597		第2回バビロン捕囚（エホヤキン王）
41	前596頃	預言者エレミヤ	ゼデキヤ王　21歳で王となる
40	前587	預言者エレミヤ	バビロニヤ軍がエルサレムを包囲中
	前586		エルサレム陥落　第3回バビロン捕囚
42	前586	預言者エレミヤ	残留民がエジプトへ逃亡
	前536頃		捕囚から帰還して神殿再建着工
31	前458頃	祭司エズラ	帰還した民に律法を教えた学者
32～34	前445頃	総督ネヘミヤ	エルサレムの城壁再建
35		（祭司）	祈りと感謝の関係を示す箇所

31. イスラエル民族の罪を告白するエズラの祈りに関して

(1) エズラ9：1～10：1　特に10：1

(2) 9：5「夕方のささげ物の時刻になって、私は・・・ひざまずき、私の神、主に向かって手を差し伸ばし、祈って、」とある。また、10：1「エズラが神に宮の前でひれ伏し、涙ながらに祈って告白しているとき」とある。9：6～15は、エズラの祈りのことばである。

(3) この祈りには、5つのポイントが含まれる。

① 姿勢・・・エズラは、ひざまずき、主に向かって両手を差し伸ばした。

② この祈りは、イスラエル民族の「不信の罪」に直面し、それを恥とするエズラの祈りである。

- 不信の罪とは、9：2によると、「聖なる種族」であるイスラエルが、神のみこころに背いて、周囲の国々の民と「混じり合ってしまった」ことである。
- 「聖なる」とは、神のよってこの世から取り分けられた、という意味である。イスラエルの民が特に清かったとか、良かったとか、力があったからではない。神の選びは、恵みによる。
- 神に背を向けていた人類の中から、アブラハムを選び、その子イサクを

選び、その子ヤコブを選んで、神はイスラエル12部族をご自分の民とされた。それは人類の中で、神を証しする民をこの世から取り分け、彼らをとおして神の恵みを明らかにするためである。にもかかわらず、そのイスラエルが真の神を否定する諸国民と混じり合ってしまうのなら、もはや「聖なる種族」として召された使命が果たせない。

- より具体的には、偶像崇拝をしている異邦人の女性をユダヤ教に改宗させずに妻とし、結婚後も引き続き妻が偶像崇拝を続けるのを黙認していた罪である。他民族との結婚そのものが罪というわけではない。

③ この祈りには、過去の罪に関する告白を含んでいる（6～7節、11～13節）

④ この祈りには、現在の罪に関する告白を含んでいる（14～15節）

⑤ この祈りには、3つの事が付随している（10：1）

- 罪の告白
- 涙ながらに
- 神の宮の前でひれ伏して

(4) エズラは祭司である。この祈りは、祭司によるとりなしの祈りである。

32. エルサレムの城壁再建に関して

(1) ネヘミヤ1：1～11、特に4節、6節、11節

(2) このネヘミヤの祈りに見る7つのこと

① 断食を伴う

② エルサレムの城壁が崩れたままであることについて祈る

③ イスラエル民族を代表して祈る

④ 罪の告白をする

⑤ 「イスラエル民族を回復する」という神の約束に基づいて祈る

⑥ とりなしの祈りである

⑦ 城壁の再建についてペルシヤ王の許可を受けられるようにと願う

(3) このときのペルシヤ王は、アルタシャスタ

① 王はその治世第7年（紀元前458年頃）、祭司で学者であるエズラをエルサレムに派遣した（エズラ7：1～28）

② そのとき、ユダヤ人たちは城壁の再建にいったん着手したが、王はその再建工事を認めず、武力をもってやめさせた（エズラ4：7～23）

③ ネヘミヤのこの祈りは王の治世第20年（ネヘミヤ1：1）であるから、城壁再建工事が王によって止められてから13年後である。

33. 城壁再建についてペルシヤ王に許可を求めたときの祈りに関して（王の治世第20年）

(1) ネヘミヤ2：1～8、特に4節

(2) 王がネヘミヤに対して「あなたは何を願うのか」と問うた時、ネヘミヤはとっさに神に祈り、王が自分の願いを受け入れてくれるようにと祈った。

34. 城壁再建を巡り反対者による攻撃から守られることに関して
    (1) ネヘミヤ 4：7～14、特に 9 節
    (2) 周辺異民族が、ユダヤ人を排斥するため、エルサレムに攻め入って混乱を起こそうと陰謀を企てた（8 節）。この動きを受けての祈りである。神に自分たちを守ってくださいと願う祈りである。
    (3) 敵の来襲に備えて日夜見張りを置くという具体的対応を伴った祈りである（9 節）
35. 祈りは感謝の歌で始まることに関して
    (1) ネヘミヤ 11：17
    (2) マタヌヤは、レビ族の歌うたいアサフの子孫。祈りのために感謝の歌を始める指揮者であった。
    (3) 祈りを始めることは祭司の務めであった。そして祈りはまず感謝から入った。
36. ヨブによる友人たちのための祈りに関して
    (1) ヨブ 42：7～10、特に 8 節、10 節
    (2) ヨブは 3 人の友人のために祈った。これはとりなしの祈りである。
    (3) ここでは、犠牲をささげることが伴った。
37. アッシリヤから守られるようにとの預言者イザヤの祈りに関して
    (1) イザヤ 37：1～4、特に 4 節
    (2) 18 番の祈り、II 列 19：1～7 の並行箇所
    (3) この祈りは、イスラエル民族のための祈り、アッシリヤの攻撃から守られるようにとの祈りである。
38. アッシリヤから守られるようにとの王ヒゼキヤの祈りに関して
    (1) イザヤ 37：14～21、特に 15 節、21 節
    (2) 19 番の祈り、II 列 19：14～20 の並行箇所
    (3) アッシリヤの王に対峙したときのヒゼキヤの祈り、この祈りに神は答えられた。
39. 病気から癒されるようにとの王ヒゼキヤの祈りに関して
    (1) イザヤ 38：1～8、特に 2 節、5 節
    (2) 20 番の祈り、II 列 20：1～7 の並行箇所
    (3) この祈りは、病気から癒していただきたいというヒゼキヤの個人的な願いに関するものである。この祈りに神は答えられた。
40. 預言者エレミヤの象徴的行為に関して
    (1) エレ 32：16～25、特に 16 節
    (2) 32：6～15 では、神はエレミヤにある象徴的な行為をするよう求めた。それは間もなくバビロニヤによって占領されるであろうことがわかっているのに、畑を買うという行為である。
    (3) エレミヤは神がなぜこのようなことをさせるのか、理解できなかった。そこで、その理由を問う祈りをした。

① この祈りは、神に教えを求める祈りである。

② エレミヤにとっては個人的な要求ともいえる祈りである。

41. 南王国の最後の王ゼデキヤがバビロニヤに反逆しようとしたときの、エレミヤの祈り

(1) エレ37：1～5、特に3節

(2) 王ゼデキヤは、誓いを破ってバビロニヤに反逆するという方針を取ろうとしていた（Ⅱ歴 36：12～13）。そしてそれを正当化するために、預言者エレミヤにとりなしの祈りを求めた。

(3) 主のお答えは37：6～10

① カルデヤ人＝バビロニヤ軍が、エルサレムの町を火で焼くようになる。

② すなわち、バビロニヤに反逆せずに服従せよ、というのが神のみこころであった。

(4) 王ゼデキヤの願いは、神に受け入れられなかった。彼は罪と不従順の中にいたからである。

42. 残留の民たちに関するエレミヤの祈り

(1) エレ42：1～22、特に2節、4節、20節

(2) バビロニヤによってエルサレムの町が破壊された後、わずかな人数であったが、バビロン捕囚を免れてイスラエルの地に残留させられた者たちがいた。彼らはエレミヤに、神のみこころを問うてほしいと願った。このままバビロニヤの支配を受け入れてイスラエルの地に残るべきか、それともバビロニヤの支配を拒否してエジプトに亡命するかである。

(3) この祈りは、神のみこころを問う祈りである。

(4) この祈りに神は答えてくださり、「エジプトに下ることはせずに、この国にとどまれ」と言われた。しかし、民は従わず、エジプトに向かった。

預言者エレミヤについては、2019年5月12日の熊本聖書フォーラム資料の一部（2ページ分）を添付します。参考になさってください。

□本日の内容　預言者エレミヤを復習しつつ、ダニエルの時代背景を学ぶ

1. エレミヤは、預言者としての召命を受けたときに、あらかじめ次のように主から命じられていた。激しい反発を受けて命の危険も感じることになること、しかし、主が必ずエレミヤと共にいて救い出すので、恐れてはならない（エレ1：7～8、17～18）。
2. 主の予告のとおり、エレミヤは、脅され、打たれ、足かせにかけられ、裁判にかけられるなど、苦難を受け続けた。彼の苦悩の叫び（エレ20：7～18）。
3. エホヤキム王の治世第3年、BC606年、バビロニヤ軍が侵攻し、エルサレムを包囲した。翌年、第1回捕囚。このとき少年ダニエルたちがバビロンに連れて行かれた（ダニ1：1～6）。「王族か貴族を数人」、「ユダ族のダニエル、・・・」
4. 第1回捕囚が起きた年は、エレミヤが預言を開始して23年目（推定42歳頃）。BC605年、エホヤキム王の治世第4年、この年、エレミヤは、バビロニヤの支配は70年続くと預言した（エレ25：1～14）。
   (1) エホヤキム王もいったん捕囚になった（Ⅱ歴36：6）が、バビロニヤに忠誠を誓ったので、助けられ、ユダの王に戻った。
   (2) しかし、それから3年後に再び、バビロニヤに反逆した（Ⅱ列24：1）。
5. BC598年エホヤキム王が没した。その遺体は丁重には扱われなかったと推定される（エレ22：18～19）。その子エホヤキン18歳が王位に就くと、すぐにバビロニヤ軍が来て町を包囲した。
6. エホヤキン王は降伏して捕虜となった。BC597年、第2回捕囚（第1回からは8年後）。
   (1) 王、王の妻たち、王の母、家来たち（兵士たち7千人と勇敢な戦士たち））、高官たち、有力者1万人、職人と鍛冶屋1千人もみな、捕らえ移された（Ⅱ列24：6～16）。
   (2) この第2回捕囚の中に、祭司エゼキエルがいた（エゼ1：1～3）。
   (3) バビロンの王の側近として、ダニエルがいることは、捕囚の民のなかでも知られていた。エゼキエルの預言の中には、ダニエルの名が、ノアやヨブの名と並んで言及されている（エゼ14：14）。
   (4) エレミヤは、捕囚の民たちに手紙を書いて、彼らを励まし、70年の預言を伝えた（エレ29：1～23）→　29章1～6節、10節
7. バビロニヤは、エホヤキン王に代えて、エホヤキンのおじ、ゼデキヤを王にした。このとき、エレミヤは、「二かごのいちじく」の預言（エレ24：1～10）。
8. ゼデキヤ王は、21歳で王となり、11年間の在位であった。王となって後、ゼデキヤはバビロンの王に反逆した（Ⅱ列24：20）
   (1) ゼデキヤの反逆に対して、バビロニヤ軍はエルサレムを包囲したが、エジプト軍の動きを見て、いったん退却した。このとき、エレミヤがエルサレムから自分の出身地に行こうしたとき、バビロニヤへ逃亡しようとしていると疑われて捕縛され、丸天井の地下牢へ長い間閉じ込められた（エレ37：3～16）。
   (2) ゼデキヤ王は、エレミヤの命を助けるため、彼を地下牢から監視の庭に移した。毎日パン1個がエレミヤに与えられた（エレ37：17～21）。
9. 第2回捕囚から第6年、ゼデキヤの治世第5年、BC592年、主の栄光が神殿から去った（エゼキエル8～11章）。
10. ゼデキヤの治世第9年、バビロニヤ軍が再びエルサレムを包囲した。包囲は第11年ま

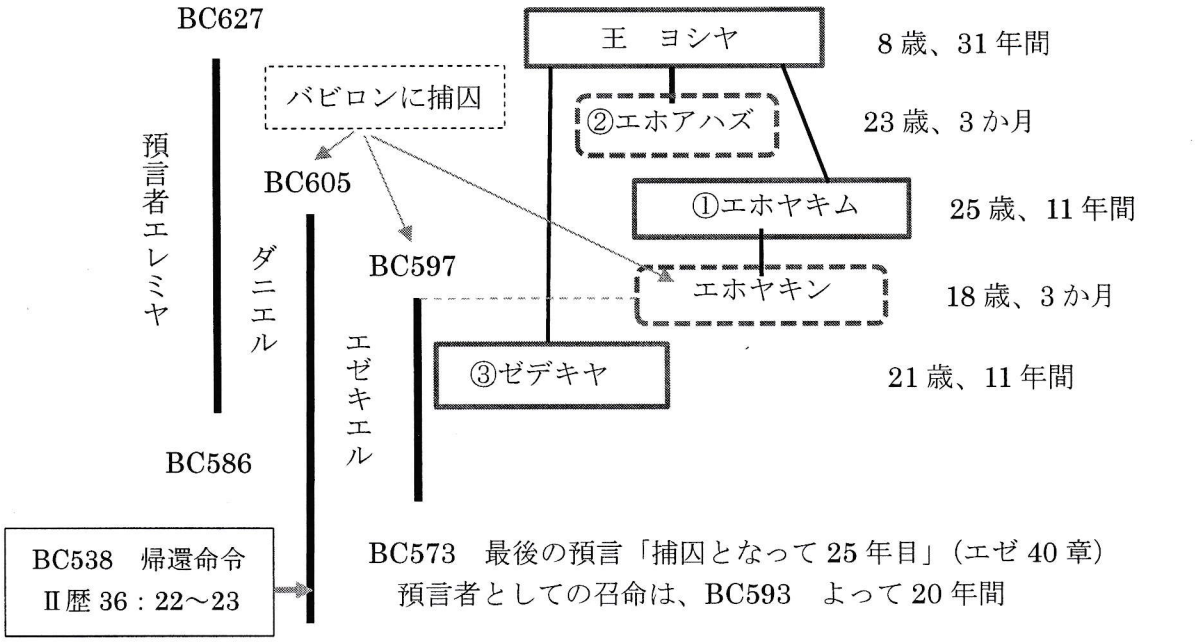
ダニエルは、BC539に、この「70年の預言」を知った（ダニ9：1～2）

265

ゼデキヤ王への預言（21：1～10、27：12～22、32：3～5、34：2～6、37：7～10、38：1～6、38：14～28）
目についての預言（エゼ 12：13）

で続いた（エレ 39：1～2）。

11. 包囲される中、第10年、エレミヤは監視の庭で、預言（エレ 32章～34章）。
12. 町からパンが尽きる。エレミヤは、監視の庭の中にある「王子マルキヤの穴」に投げ込まれ、命が危うくなる。クシュ人の宦官が王に告げて、エレミヤを穴から救出した。エレミヤはエルサレム陥落まで監視の庭にいた（エレ 38章）。
13. 第11年第4の月の9日（7月18～19日）に、バビロニヤ軍は町を破り、中央の門を占領した（エレ 39：2～3）。ゼデキヤ王は町から逃げてアラバを目指したが、エリコの草原で追いつかれ、逮捕された（Ⅱ列 25：4～7）。
14. 第11年第5の月の7日（8月14～15日）に、神殿と王宮、エルサレムのすべての家が焼かれた（Ⅱ列 25：8～9）。さらに、エルサレムの周囲の城壁が取り壊された（Ⅱ列 25：10）。
15. 第3回捕囚（Ⅱ列 25：11～12）。このとき、バビロニヤ軍は、エレミヤを捕囚の民の中から連れ出して、エレミヤの望むようにしようと申し出た。しかし、エレミヤが答えなかったので、エレミヤに食糧と贈り物を与えたうえで、彼をユダ総督に立てたゲダルヤに渡した（エレ 39：11～40：6）。
16. その後、残留の民による反乱とエジプト逃避行。エレミヤはこれに巻き込まれる。エレミヤを通して主は、民にエジプトに行かないでユダに残るように告げた。しかし、民は従わず、エレミヤを連れてエジプトへ。
17. エレミヤはエジプトで死んだものと推定される。BC586年、エレミヤ推定61歳頃の死。最後まで、主に語られたことばをそのまま語る預言者であった。そして迫害する相手を恐れるなという主の命令に従い通した、忍耐の預言者であった。



BC536　捕囚から70年目
最後の預言（ダニ 10：1～12：13）　ペルシヤ王クロスの第3年
バビロンにいたのはクロス王の元年まで（1：21）。ティグリス川岸（10：4）。
ダニエルはこの預言の後、死んだ。この年、エルサレムでは第二神殿着工。